

第71回埼玉県美術展覧会 審査評

【第2部 洋画】

○総評

審査主任 庄司 剛

第71回埼玉県美術展覧会の洋画部の作品搬入総数は昨年よりやや減少し、内訳は、一般出品者数613点、会員出品者数440点、運営委員、審査員、委嘱、招待者数110点、遺作1点、総合計の出品点数1,164点でした。

三日間かけ丁寧に審査しました。残念ながら入選できなかった作品を、入選した作品と比較してみると、自己主張の弱さ、こだわり、といったものが不足しているように感じました。入選作品の表現の幅が広がり、素材等も多様化してきています。コラージュでの作品やレリーフ的な作品、デジタルを活用した作品等々が出品されてきていますが、座する人物像、写真を使用した風景写生、古い生活用具をモチーフに描いた静物画等の作品がまだ多く見受けられました。絵は「写すから描く」をして造る元を作者が育ててゆくものだと思います。

また、二次元の空間の中に三次元や四次元を思わせる空間を色と形で造ってゆく作業だと思いますので、構成、配色、絵肌、素材等にもう一つ工夫を凝らした作品作りに期待したいと思います。

○埼玉県知事賞

「明日への鍵」 生田 繁夫

朽ちゆく工場の配電板なのでしょう。鍵が画面の中央に描かれ、その周囲を配線がめぐり、抜け落ちた箇所からは青空が見え、そこに蝶が舞っています。

配電板のかたわらにも蝶が描かれています。作家の意図は何でしょうか。私には朽ち滅びゆくものと、蝶の生命を画面の中で対比させながら生命の循環をテーマに描いているように感じられました。

丁寧に描かれた筆致で材質感を描き出し、絵肌も美しく、構成もしっかりしていて好感の持てる作品でした。

○埼玉県議会議長賞

「梅香春風」 池田 竜太郎

極限まで単純化された梅林の形態と、ペインティングナイフによると思われるそのタッチは、まるで抽象絵画を見るようですが、重厚に塗り込められたマチエールは決して重くなく、その幽玄とも言える色合いによって、逆に柔らかさを感じさせます。

絵具の合間合間から見え隠れする梅の花の色は控えめですが、それらは匂い立つように美しく画面を満たしています。

○埼玉県教育委員会教育長賞

「カフェ／出口」 柳 辰太郎

公園や広場にあるガラス張りの建物を主題にして、反射して映る公園風景と透けて見えるカフェの店内とが複雑に織り重なる様相が、都市的な自然の感じ方で描かれています。

塗装の少しはがれた出入口の建具や、その使いこまれた感じと平滑なガラス面上の織りなしとの対比が建築や都市空間のなかに現れる、独特な自然を表してとても魅力的です。

○埼玉県美術家協会賞

「心の視線」 渡辺 浩子

色感が良く、タッチも軽妙です。厚く塗ったり、サラッと塗ったりと、そのタッチには変化があり、自由で伸びやかです。そしてその色は、もはや物を表すためだけの色ではなく、物を離れて、画面に美しいハーモニーをつくっています。

画面右の人物の傾き具合は、重力から解放されたようで、その心もまた、しなやかに明るく解き放たれているように感じます。

○埼玉県美術家協会賞

「枯木回生図」 五味 至

長い時間をかけて創造された流木のダイナミックなフォルムが何とも躍動的で、まるで命を吹き込まれたような、今にも動き出しそうな気がします。有機的な流木と無機的なブルーのペットボトルが大胆に構成されています。

筆か何かで丹念に描き込まれたマチエールとそれぞれの質感が見事に表現されていると感じました。画面全体を漂うシャープな緊張感が魅力です。

○埼玉県美術家協会賞

「柘榴林林図」 半山 修平

画面から飛び出すような柘榴の赤と、その割れ目から見える明るい黄色が鮮烈です。絵具を流し込んだかのようなそれらの色は、下層の色を美しく封じ込めている周囲の白とともに、激しいせめぎ合いを繰り広げています。

そして、そのせめぎ合いは周りへ周りへと増殖し、林のように広がっていくようです。それだけのエネルギーをこの画面は持っています。最後は光沢のある樹脂で、標本のように美しく包まれています。

○埼玉県美術家協会賞

「渦潮に舞う」 矢島 英夫

矢島英夫氏の作品は、主に貝をモチーフにして、海の世界観を表現しています。物静かでありながらも、見る人の心を引き込む魅力があります。そこには、人としての豊かさが感じられます。今回の受賞を励みとして、ご自身にとっての、美しい世界の探求を続けていただければ幸いです。これからも、作品を通して、明るく前向きな気持ちを発信してくださることを願っています。

○さいたま市長賞

「竈」 小川 吉之丞

この作家は、ここ数年、竈をモチーフに描いており、昔多く農家で見られた時代の情景が審査員に評価されました。

全体をモノトーンに近い方法でまとめたことで臨場感が生まれ、より効果的な作品に仕上がりました。

特に燃える朱色も画面を引き立たせている秀作です。竈の焚口の炎の部分にもう少し陰影を加えると更によかったと思います。

○さいたま市議会議長賞

「画室の静物」 高橋 瑞紀

黒いトランクで画面が引き締まり、思い切った構図と色が魅力の静物画です。

何層にも塗られた絵具も力強く重厚な画面を作り、筆を使用せず、ナイフで全て処理されたタッチが作者の味を出しステキです。色もトランクの黒と前方の椅子、テーブルの暖色と烏瓜の色の調和をよく考え構成された秀作です。今後の更なる活躍を期待いたします。

○さいたま市教育委員会教育長賞

「うす日」 関河 英幸

「うす日」の題名通り、薄日の差す情景を全体に茶褐色で統一しており、雪との配色も見事です。

更に背景の杉木立と、その先の白い小さな屋根の部分を加えたことで、アクセントのついた素敵な作品になったと思います。この作品の真中から上部左面半分だけでも立派な作品になりそうです。

次回作品を期待しております。

○時事通信社賞

「春を待つ」 猪俣 修

女性が座っているシンプルな光景を、余計なものを足さずに、確かな観察と丹念な描写で迫力ある画面に仕上げているところが素晴らしいと思います。

髪の毛、肌、ワンピースのどの部分もしっかり質感が感じられるほどの描写ですが、特にカーディガンの描き込みは圧巻です。

人物と比べると背景はまだ弱いのが惜しいところです。影の色味を工夫し、背景を画面構成に活かすことを考えると、ますます良い作品になると思います。

○FM NACK5賞

「今日の空」 竹井 侑子

タイトルを聞いただけでは、予測のつかない作品です。

日本画の画材や技法を使用し、幾重にも色や工夫を重ねています。独特な発色や素材感、具象と抽象の意識を融かす自由な表現に加え、見るたびに新たなかたちと出会えるところも魅力です。どこか一箇所だけでも捉えやすいかたちを配してみれば、と覚えてしまったのは野暮というものかもしれません。

○朝日新聞社賞

「秩父銘仙」^{ちちぶめいせん} 安藤 ^{あんどう} 政夫 ^{まさお}

シンプルで落ち着いた色調の背景に秩父の名産である着物を纏う女性の落ち着いた人物の佇まいがストレートに伝わってきます。人物の表情や着物の模様を丁寧に描き、着物の赤の美しさが引き立った作品です。制作者の優しい眼差しが柔らかな筆使い、色合いに感じられます。じっくりと鑑賞したい味わい深い秀作です。

○NHKさいたま放送局賞

「穏やかな日」^{おだやかなひ} 加藤 ^{かとう} 仁史 ^{ひとし}

秋の兆しが見え始めたころ、さわやかな水色の空は遠く澄みわたり、わずかに黄葉し始めた木の葉、草の葉は明るく色鮮やかに照り輝いています。下方画面わずかに描かれた川面に反映された枯草が画面を引き締め、枯草の影と暗さのコントラストに美しさを感じます。そしてその川面の暗さが上の草木の明るさを引き立てています。

○共同通信社賞

「卓上の静物」^{たくじょうせいぶつ} 城 ^{じょう} 真知子 ^{まちこ}

縦長のテーブルにグレーの布が敷かれ、籠に入った沢山のからすうりが印象的です。秋から冬へと移行する季節の移ろいを強く暗示しているかのようです。からすうりとりんごの赤とレモンやカーテンの黄が対照的に配置され、リズムカルに縦の動きを作り出しています。絵具をしっかりと重ねながら空間的な奥行きを表現していて、作者の思いが強く感じられる秀作です。

○埼玉新聞社賞

「警戒中」^{けいかいちゆう} 吉川 ^{よしかわ} 具明 ^{ともあき}

この作品は、激しい蛍光の絵の具を使いながらも彩りの不釣り合いを感じさせない感覚と、対象を絞ってそこに色彩を転換・定着させる、きっぱりとした気心が心地良いです。表現とはひとつの形で他にはない、私にしかないもの。

この絵は、対峙する鳥が作者でむざんにもぼっさり切られた木の上に立ち、我こそここにありと緊張感漂う景色を表している、そんな顛末が表されているようです。それもほとんどすべて色彩で。

○高校生奨励賞

「きらきらきめら」^{ながさわ} 永澤 ^{ともえ} 友恵

若さ溢れる力強い作品です。巧みなデッサン力と構成力が感じられ、「異質同体」一つの画面にイラスト風に描かれたスーパーフラットの部分と写実に描写された顔や手など様々なコントラストを楽しんで制作される様子が伺うことができます。人物の虚な表情とキャラクターのポップな雰囲気ギャップが絵の魅力を引き立てています。

○埼玉県美術家協会会長賞

「石膏像と赤いリボン」 坂井 みつ子

右斜め上から柔らかな暖かい光が差し込んでいます。画面中央の白い石膏像が何とも美しく魅力的に表現されています。石膏像に掛かるテープやワイン、そして花の赤、背景の布のピンクがポイントとなって三角形構図のような安定感を生み出しています。作者のモチーフと向き合う真摯な姿勢と確かなデザイン力が、ゆったりとした心地よい空間を作りだしていると思いました。

○高田誠記念賞

「希望」 永江 咲紀子

岩肌に描きだされた菩薩像で静かな祈りを感じる美しい作品でした。

色彩の調和が美しく、絵肌にも工夫があり、像のフォルムもバランスが良く全体に整っています。

やや岩肌が説明的になっている点が気になりますが、質の高い完成度がある作品です。

この物静かな祈りは作者自身の祈りなのかもしれません。